

特定非営利活動法人 日本免疫学会
平成 27 年後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	北川 瑠子	会員番号	0033798
申請者の 所属・職名	大阪大学免疫学研究センター実験免疫学・大学院生		
出席会議名	Keystone Symposia Chromatin and Epigenetics		
発表論文 タイトル	Genome organizer Satb1 guides regulatory T cell development by establishing super-enhancers		

実施結果:

平成27年度後期Tadamitsu Kishimoto International Travel Awardをいただき、2016年3月20日から24日までKeystone Symposia: Chromatin and Epigeneticsに参加しました。

本学会では、ハエ、魚、マウス、ヒトなど様々な生物を対象とする研究者が集まり、細胞分化、生体発生におけるエピジェネティック制御について活発な議論がなされました。私は、制御性T細胞の発生におけるエピジェネティック制御についてポスター発表を行いました。この研究の中心であるスーパーエンハンサーは5年ほど前に定義され、極めて重要なゲノム領域として認識されてきています。実際に、本学会でもスーパーエンハンサーについての発表が数多くあり、非常に参考になりました。免疫学領域からの参加者が少ない学会で、私たちの研究成果がどの程度通用するのか不安がありましたが、免疫細胞の分化過程はこれまで多くの研究がなされており、病気との関連も強いいため、免疫細胞を対象としてスーパーエンハンサーの役割について研究することは多くのメリットがあることを改めて実感することができました。エピジェネティックスの専門学者の方々にも興味深い結果であるというコメントをいただくことができ、免疫学の中で最新のエピジェネティックスを研究したいという目標ができました。一方で、下等生物でしかできない実験や、培養細胞でしかできない最新のテクノロジーを駆使した実験を目の当たりにし、これらの実験で得られた結果をどう免疫細胞分化に応用するか、そしてそのエピジェネティック制御に関する知識をどう免疫疾患の予防や治療につなげるかということを考えさせられました。

近年テクノロジーの進歩と莫大なデータにより科学者としてできることは増えてきていると感じます。その中で、どのように情報を活用すれば新しい概念を生み出し、生命科学の謎を明らかにできるか、分子生物学の最前線の研究を4日間集中的に学んだことは今後の研究に対する姿勢を考える刺激的な体験となりました。

この度は学会参加を支援していただき誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。